

師弟愛のシンボルとして・・・朝永律朗句碑建立記

発起人代表 阿野 露園

近代長崎俳壇が生んだ異色の田園詩人、朝永律朗句碑が母校の長崎小島小学校に建立され、平成十九年五月一日火曜日除幕、贈呈式を挙行致しました。

当日は午後二時五十分から長崎市教育委員会管理部長前川栄一郎氏はじめ、小島小学校父母と教師の会会長 八木有江氏、同窓会会長 有吉作之氏、桜花会俳人代表の山崎末人(唐風)氏、朝永律朗顕彰会関係者らが出席し、子息の朝永律氏、小島小学校校長 塚本俊朗氏、顕彰会会長 寺井房夫氏、発起人代表 阿野露園の手で除幕を行いました。朝永律氏の謝辞に続いて献花、献酒があり、律朗句碑寄贈の目録を贈呈。塚本



律朗句碑除幕式 (阿野氏提供)

校長から「本校の文化財としていつまでも継承し、師弟愛の句碑を教訓に活かしていきたい」旨のお礼の言葉がありました。

贈呈式のと橋口石材彫刻店社長 原勝幸氏の献身的尽力に対し感謝状を贈り、句碑命名の趣旨について「師弟愛のシンボルとして小島小学校から世界へ発信したい」意味の寺井会長の説明で五月晴れの下、めでたく除幕式が営まれました。

このたび建立の律朗句碑は第三十八代小島小学校校長 寺井房夫氏の篤志

に収めてあり、後の一句を選んで律朗句碑に刻ませたのでした。

校庭の落花吹き寄せ吹き散らし (律朗句選より)

右の二句は大正十四年四月十一日、同窓会建立の勤続三十年記念「田中英二先生頌徳碑」の下で詠まれています。戦後の昭和三十年十一月には律朗を発起人に同窓会で田土英句碑が建立され、自然石の表に草書体の自筆筆跡を拡大して二行に刻してあります。散る花を／手にうけて思ふ事多し 田土英

この句には「三十八年勤続の教職を退く日(昭和六年春)の詞書があった、昭和十年上梓の「田土英句集」の中に見出されます。田土英・律朗の両吟が呼応し、師弟句碑二基が肩を並べて建っている姿は、ひどく美しいものです。

田土英師系の愛弟子、律朗朝永利一郎(明治三十六年〜昭和三十八年)は長崎市小島郷(現上小島一丁目)に父嘉一郎、母ヨ子の長男として生まれ、大正四年小島小学校第二十九回卒業。大正九年母校宿直室で田土英句抄「燼」を見て、恩師の田土英に添削通信指導を仰いでいます。大正十年一月二十五日の添削通信に田土英は「俺が歎の一連は涙が出るほど嬉しかった／これではじめて律朗の面目が出て来たのだ」と真情あふれる言葉を書き残しております。律朗が感激の余り「私は一生を田園詩人の四字と百姓の二字を等分にしようと深く決心」するエピソードを田土英添削通信「鋸屑 全」の中に読むことができます。その「暖い冬の畑の一日」連作十四句から三句のみを以下に挿入しておきます。田土英四十六歳、律朗十七歳でした。

土の香りの尊さと俺が歎の輝き 律朗
歎毎に新しき黒い土よ暖い冬の畑 律朗
心にかざす歎よ鉢巻がとれた 律朗

(「暖い冬の畑の一日」より)

新傾向全盛期を経て昭和四年、田土英創刊主宰誌「太白」編集長として十四年。昭和十八年田土英没。師弟永訣の日は迅速に訪れます。戦争末期の昭和二十年四月、句集「牛とともに」刊。私家本「鋸屑」「野火」和綴本「律朗句選」全四冊「律朗句存」「石楠」など。

生前田上十雨亭建立の腫塚(手ひろげて落葉を浴びるその腫)は朝永家墓所に移築再建されています。

(長崎文学研究家)

で、平成十六年の同校創立百二十周年及び朝永律朗生誕百年記念に一念発起し、朝永家と寺井氏の費用で建造することが決まったものです。律朗句碑除幕に当たり多大のご指導、ご協力にあずかりました長崎市教育委員会、小島小学校、父母と教師の会、同窓会の方々、朝永律氏に対し深い敬意と感謝の意を表します。

律朗句碑は長崎市愛宕一丁目、小島小学校校庭の一隅に田中田土英句碑と並んで向かって右脇に建っています。碑は台石とも高さ一・五m、幅〇・五m。厚さ〇・一八mの中国産卵形黒御影石に縦〇・六一m、横〇・三二mの長方形額縁を彫り込み、磨き上げた正面に行書体の自筆筆跡を拡大して四行に刻まれ、金彩を入れています。

落花／暫く緋桃の／空に吹かれけり／律朗

碑陰の撰文(阿野露園)は隸書体の活字を、やげん彫りで六行に刻み、表同様に本磨きの額縁で囲ってエナメルの白を文字に入れました。碑文は次のように記されています。

大正十四年四月「律朗句選」より
田土英 田中英二先生頌徳碑の下にて詠まれた染筆を 師弟愛の句碑としてここに建立します
落花暫く緋桃の空に吹かれけり

平成十九年四月吉日／朝永律朗顕彰会

碑文には児童のみなさんに親しんでもらえるよう、句に振りがなを付けることにしました。また田土英作詞の小島小学校校歌「小桃源の昔より」にちなんで、桃源郷小島の里にふさわしい花桃の木を一本碑前に植えました。施工の橋口石材彫刻店が植木の里古賀で見つけてきたそうです。師弟愛の句碑とともに永く守り継がれていくことは最高の喜びです。

田土英・律朗師弟碑は小島小学校体育館寄りの一角に小島川のせせらぎを背に東面して建っています。自筆本「律朗句選 その二」は大正十四年四月の部に「田翁表彰碑の下にて 二句」と前書きし次の句を先

風信

○先月、五月二十八日、本会創立二十五周年を記念して茶話会を開催。本会創立当時、十八銀行内経済文化部におられ本会創立事務を担当して戴いた蒲池智明氏(現本会理事)に発会当時の模様を話して戴いた。

○創立当時の人で今も元気でおられる人は私と越中先生と結城神父様、女性では福島喜美、清島和枝の両女史と諫早の犬尾郁子女史です。ねと蒲池さん言われる。

○そして其の創立の年の七月二十三日夜、長崎大水害にあい本会事務所の一階にあった十八銀行公会堂前出張所の床下にまで水が押しよせてきた。

○当時の十八銀行頭取は故清島省三氏で、早速、私の所に「無事だったか」とお電話いただいた事を思い出す。

○そして其の時、清島頭取より「記録は大事だから、これから毎月各方面の多くの人達に原稿を依頼して機関紙を出したらどうかね」と言われた。早速私達は相談し、其の年の八月機関紙「ながさきの空」第一号を発刊している。

○ところで今年の五月二十四日は即非禅師渡来三百五十年祭が長崎崇福寺内で開催され、関西・四国・九州方面の黄檗宗関係五十数名の住職が参加された。実に荘厳な儀式で御招待をうけた一同、三百年前の昔にかえり感激にひたり午後四時・崇福寺を辞した。

○六月九日(土)NHK長崎文化センター主催の九州国立博物館特別展見学に行く。今回は浄土系絵画彫刻で、展示品の中に国宝十五点、重文五十点もあり実にすばらしい研修旅行であった。

○長崎県美術館主催の特別展「日曜美術館三十年展(七月一日まで)」に行く。九州地区では長崎市のみで開催とあり、各地より参観者が多かった。中でも日本初期油絵高橋由一の鮭(重文)、モネの水蓮、ルノワールの「休息」、藤島武二の「天平の面影」(重文)、上村松園の「小町」など日頃みれないものばかりで、感激であった。

○長崎では六月一日を長崎くんち「小屋入り」の日と言ひ、「此の日より夏衣を着る」と言う。然し、この六月一日は旧暦の六月一日で今年は七月十四日となる。昔はこの頃より夏衣にしたのでしようね。

